

磯子区の歴史は面白い、だからこの町が好き!

磯子区郷土研究ネットワーク代表 葛城 峻

人の顔がみんなちがうようにどの町にも個性があり独特の味がします。原始古代から現代までそれぞれの土地には東西南北の「風」がエネルギーを運んでくれました。高気圧から低気圧に向けて風が吹くようにわが町にもその時代の気圧の高いところから様々な文化が流れこんできました。どんな風が強かったのか、また自然の地形が風の通りをよくしたのか、それとも塞いだのか、その結果どんな文化が磯子区の地下水となっているのか、考えてみましょう。

数学の図形の難問で頭を抱えたとき「補助線」を引くと簡単に解けることがあります。等高線だけの磯子区の地図を頭に浮かべてみると、太古からの自然のかたちとして三つの部分が見えてきます。地表に降った雨は根岸湾が大岡川かどちらかに流れて行くほかありません。磯子区は、雨が「根岸湾に注ぐ部分」と「大岡川に注ぐ部分」に大きく分けることができます。さらに海岸部は国道16号線が横須賀まで貫通する前は旧プリンスホテルの丘が海まで伸びていて海岸の道もなかったのです、この丘の線で南北二つの部分に分かれます。わが区は低い丘陵線がちょうどカタカナの「ト」の字のような骨格になっているので、これを補助線に使えば三つのエリアが浮かんできます。

北の南区との境から区役所あたりまで、滝頭・岡村・根岸・磯子・汐見台などの町々は「臨海地帯北部」、屏風ヶ浦から杉田の南までは「臨海地帯南部」と言えるでしょう。大岡川沿いの田中から氷取沢・峰までは当然「大岡川流域部」です。三つのエリアにどんな独自性があった

かをベースに、また今の磯子区全体が他の行政区とちがっている独自性を重ね、大小二つの視点から考えてみましょう。紙面の制約のためラフなデッサンになりますがお許しください。

まず**第一の「臨海地帯北部」**です。岡村の三殿台遺跡は区内唯一の国指定史跡で、縄文・弥生・古墳の三つの時代を通じ数千年ものあいだ私たちの祖先が同じ場所での生活を続けた全国でも珍しい重層遺跡ですが、残念ながら全国の一級河川流域遺跡からの出土物ほどの優品は見当たりません。この丘の下を流れる小さな禅馬川の流域が狭く農業生産力が低かったから当然のことです。

磯子小学校の南にあった室の木古墳出土の埴輪頭部も一見幼稚っぽく、大和や北関東の埴輪には比べようがありません。ここでは専門の工人を養うだけの余裕がなかったため、天気によれば田や海で働く庶民が雨や風の日だけ家族や仲間顔を思いながら土をこねました（従って労働する人でなければできないリアルな造形です）。しかし見方を変えれば、巨大な前方後円墳や豪華な出土品を誇る地方は生産力の高さが富の偏在を生み権力の集中につながり、その結果として豪族の遺物や遺構を残したのですから、連日古墳の造営に引つ張り出され過酷な税に喘いだ末端の人々の苦勞はどれほどだったでしょう。こちらは生産力が低かったため富の偏在も権力の集中もそれほどなく、民衆にとっては上も下も「ドングリの背くらべ」でした。貧しさは仕方がないとして先進文化地帯ほどの苦勞はなかったのでは？と思われま

す。三殿台遺跡が三時代の長きにわたって続いたのもそれだけこの地が住みよかった証拠ではないでしょうか。明治七年完成の堀割川と両岸の道路は民家の増えさせた吉田新田の「迷惑施設」を磯子区北部に追い出しました。刑務所・伝染病病院・し尿運搬船・野犬収容所・ゴミ焼き場など、中心部が都市として成長するのに都合の悪いものをみんなこの地に押しつけたのです。江戸時代のまま住民の少ないここでは反対の声のあげようもあり

るので各地を転々と移動し、新しい土地で畑をつくらなければなりません。そのため渡り歩きながら各地で吸収してきた情報は平地の民に伝播し珍重されました。「かねざわ道」の周辺は海岸新道の完成で次第にさびれますが長いあいだ田園風景を楽しませてくれました。そして急速な人口増の横浜中心部の食材を賄う近郊農業地に変身します(今も栗木のバス停に残る「温室前」はその痕跡です)。高度成長期には幸いに残っていた広大な田畑や山林が開発され、次々と大規模団地が誕生して江戸時代の勢いを復活させましたが、ここならではのことでした。

さて個別ゾーンの独自性とは別に、磯子区全体としてどんな特色があったでしょうか。元禄時代に江戸周辺の村々は旗本の知行地に再編されます。他の区では天領・寺社領・大名領などが複雑に混在していましたが、磯子区では杉田村の一部の天領を除けば殆ど旗本領ばかり。時代小説を読むと江戸期の村には郡奉行配下の下級武士が駐在し農民を監督して堤防修理や新田開発に汗を流す一方、藩御用達の悪徳商人と結託して私腹を肥やす上級武士と対立する構図が定番ですが、磯子区の愛読者が自分の町も昔はこんなだったかと思ったら大まちがいです。旗本は文字通り徳川の旗のもとにいて幕府にことがあれば直ちに馳せ参ずるのが仕事ですから、麹町や番町の旗本屋敷に釘づけになり、知行地の生産や管理は村人を選ばれた村方三役(名主・年寄・百姓代)主導でほぼ自主的な裁量に任されています。大名領は全くの閉鎖社会で国境は厳重に警備され移動も情報も統制されていて上級武士を除けば末端武士・農民には他国の情報など殆ど伝わりません。また旗本は各地の村に分散した知行地を与えられていましたから、名主たちは年貢や御用金の対策上、当然遠隔地の名主と連絡を取り合うことになり。電話も自動車もない時代ですが名主たちのひそかなアンダーグラウンド・ネットワークが生まれ、貨幣経済の浸透とともに新時代の受け皿をつくって行きました。

ません。伊勢佐木町や関内の旦那衆から白い目で見られながら、この町の人々は貧しさにめげず「長屋の連帯」で明るくたくましく律儀に生き抜いてきました。美空ひばりが滝頭の「屋根なし市場」に生まれた必然性もここにあり。滝頭と岡村で暮らした映画監督松山善三が第一回広島平和祭のため作詞し、横浜大空襲と同じ日を誕生日とするひばりが絶唱した反戦の歌「一本の鉛筆」はこの地域のテーマソングと言えるでしょう。

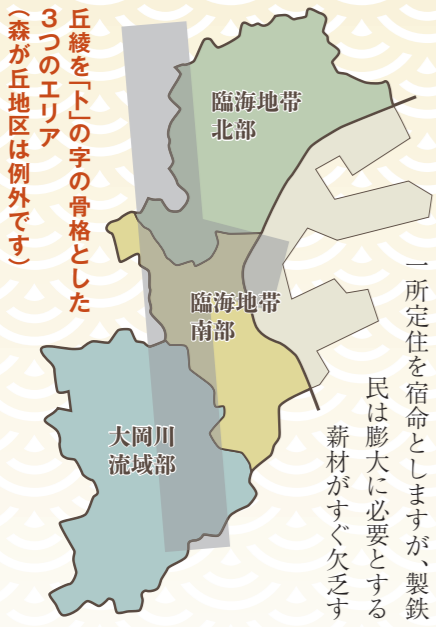
第二の「臨海地帯南部」は江戸時代に特異な情報回路を持っていて、大名領と比較にならないくらい江戸の情報を素早くキャッチしました。京急屏風浦駅の北側から笹下の東樹院に抜ける道が「清水坂」ですが、尾根筋にこの坂の道普請をした十六の村の名を刻んだ道標があります。ここは年貢米を森の港から江戸に送るため近郷の農民が牛の背に米俵を載せて登り降りした「年貢の道」で、台座には舞岡、下倉田(いずれも今の戸塚区)、小菅ヶ谷(今の栄区)など遠方の村の名があります。年貢米を運んだ船頭たちは帰りの荷を集めながら江戸でなにが起きているか頭に詰めて森に戻り、その情報は逆のコースで出荷の村に届けられました。第一地帯の農民が保土ヶ谷宿の伝馬助郷の御用で宿場に出るたび東海道に溢れる情報を持ち帰ったように、森村からもたらされる江戸のホット・ニュースはどの村でも庚申の夜だけ天下御免の酒もりで披露されました。ここでは根岸と江戸前の海が情報の太い回路になったのです。

また小田原北条期の豪族間宮氏が梅干しを兵糧にするため杉田村に植えさせた梅はみごとな花を咲かせ梅干し以上の名物となって江戸の遊覧客を喜ばせました。名産煎海鼠は絶好のお土産で、その製造現場は江戸名所図会を飾りました。杉田梅林にはのちに英照皇太后、昭憲皇太后など高貴な方々まで足を運びました。この地では居ながらにして江戸の情報に接することができたのです。

第三の「大岡川流域部」には「かねざわ道」の回路と並んで下つての根岸堀割川と間坂トンネルの二大土木工事により吉田新田と港周辺だけだった横浜は南に向けて大きく領域を拡張します。堀割川は目で見えますが間坂トンネルは区役所向いの坂の下に眠ったままです。これらに続く富岡トンネルの完成でついに横浜から三浦半島まで風通しのよい道が貫通しました。わが区域が明治時代に果たした「大横浜」への貢献を誇りたいものです。

磯子村の堤磯右衛門は石鹼製造の苦心で有名ですが、石鹼以上に評価されるべきは石鹼製造所での「定時制」の採用と日本で最初の就業規則です。働く時間が日の出から日没までだった時代は夏と冬とで労働時間が大きくちがいます。これでは一年を通しての労働時間と生産量の関係が判断できません。磯右衛門は明るさや暗さに関係なくどの季節でも始業時刻と終業時刻を同じに定め作業時間としました。これにより労働の生産性・労働力の適正な評価・効率的な経営が可能となり近代産業の思想的基盤ができたのです。就業規則は親方と子方・徒弟との古い労働関係を近代的経営集団として組み直しました。新時代の労働の発見：これも磯子区の誇りです。

わが町は鎌倉からの武士の風、江戸からの庶民の風、港からの文明開化の風、横須賀からの軍事化の風など、北から南からいくつもの風が混交し、寒流と暖流が交錯する三陸沖が絶好の漁場になったように他区にない複雑で高度な文化を発酵させながら成長してきました。世界と日本の歴史を眺めれば、ある時代に中心地として栄華を誇った地域もやがてエネルギーが枯れ、次の時代にはそれまで辺境とされていた土地が新しい中心になったことに気づきます。ギリシャからローマへ、ゲルマンへ、アメリカ大陸へ。飛鳥から奈良へ、京都へ、鎌倉へ、江戸へ。歴史を動かすエネルギー源は絶えず「中心」から「周縁」へ移動しています。私たちの磯子区はこれまでミナトの周縁地域として外から様々な風を受け郷土の基礎をつくってききましたが、区制施行九十周年の今、わが町こそこれからの時代のエネルギー源と自覚し、これまでのお返しに新しい風を横浜全区に送り出そうではありませんか。



で「製鉄の民」という職能集団が情報伝播に貢献しました。保土ヶ谷宿の「金沢横丁」で東海道と分かれ弘明寺・上大岡を経て能見堂から六浦に通ずる街道ですが海岸の新道が開通するまで江戸と金沢・鎌倉・江ノ島を結ぶ大動脈でした。当時恐れられた天然痘の治癒祈願に富岡の「いも神様(ほうそう神)」にお詣りの人々からの伝聞と一緒に大量の情報も耳から耳へ伝わりました。円海山・丸丸山・大平山を頂上とする山塊は多くの砂鉄を含む「上総層」から成り、平安・鎌倉期に中腹から上の方では製鉄を業とする「山の民」が原始的な方法で鉄をつくっていました。氷取沢や峰で畑仕事の最中に「金くそ(廃棄された不純物)」のため鍬の刃先が欠けることがよくありましたが、「金くそ場」「いもじけいと」などの「字名」は製鉄場の名残りです。氷取沢の名も昔は火にちなむ「火」取沢でしたが、忌み言葉の「火」を避けて安全な「水」に変えたのです。製鉄に関係した地名や伝承は金沢区、港南区、栄区にもたくさんあります(かんな畑、鍛冶ヶ谷など)洋光台の金山神社は鑄物師の信仰の中心でした。掘り出した岩石を砕き砂鉄を分離するには山の湧き水で水簸(みよ)しますが、かんな流(なが)して濁った水が川を汚し山麓の水田耕作の「平地の民」との間に緊張が生まれました。しかし一面では農具をつくる鉄材と米の交換という相互依存もあり、山の民と平地の民との間には「一面対立、一面連携」という珍しい関係があったのです。特筆すべきは稲作民は「一所定住を宿命としますが、製鉄薪材がすぐ欠乏する民は膨大に必要とする